石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第424号　平成31年2月1日発行

古九谷・再興九谷名品選【古美術】

彫刻と人【近現代彫刻】

石川県指定文化財《色絵鶴かるた文平鉢》古九谷
―「古九谷・再興九谷名品選」より―

吉田三郎　《雲にただよう》
―「彫刻と人」より―

特別陳列 天神画像と文房具【前田育徳会尊經閣文庫分館】

美術館でお花見【近現代工芸】

- 2月前半の展覧会
- 2月の企画展示室
- 友の会会員募集
- 2月の行事予定・ミュージアムウィーク
- アラカルト ただいま展示中

前田育徳会尊経閣文庫分館
特別陳列
天神画像と文房具

2月15日（金）～3月21日（木・祝）
会期中無休

天神は菅原道真の神号であり、学問・文芸の神として広く信仰されています。今回の特集は、会期中の二月二十五日に「道真忌」を迎えることから、「天神画像と文房具」としました。加賀藩主・前田家にとって、菅原道真は特別な存在でした。最初の理由は、道真が、藩祖・前田利家以来の家風である文武二道の理想的な体現者だったからです。少年時代から傑出した文才を発揮した道真は、三十一歳の時に百発百中の弓の腕前を披露し、人々を驚嘆させています。そしてもう一つの理由は、加賀藩三代藩主・前田利常が先祖を菅原道真と定め、菅原姓を主張し、篤く天神を信仰したことです。天神は復讐の神でもあることを思い起こせば、幕府に対して文化による挑戦を敢行した利常にとって、天神は至高の精神的支柱でした。

今回は、道真配流の悲運や怒りを含意する天神画像のほか、神奈川県鎌倉市の荏柄社に伝来した北野天神縁起である、重要文化財《荏柄天神縁起絵巻》の下巻を展示します。下巻では、北野社（現在の京都・北野天満宮）の創建とその霊験が見所となっています。

そして学問・文芸の神、天神にちなみ今回は文房具も展示します。硯、筆、紙、墨は中国の宋時代以降「文房四宝」と呼ばれ、文人の間で最も重要な道具として珍重されてきました。さらに室町時代の書院飾りにより、日本においても文房具は茶道具とともに重視されるようになりました。今回展示する文房具の多くは、小堀遠州や前田利常の収集品と考えられます。

重文《荏柄天神縁起絵巻》 巻下部分、前田育徳会蔵

第2展示室【古美術】
古九谷・再興九谷名品選

2月15日（金）～3月21日（木・祝）
会期中無休

加賀藩三代藩主・前田利常が打ち出した文化による独自性の表明は、幕藩体制における加賀藩存立の根幹でした。表向きには、幕府に対する敵意がないことの表明としての文化政策ですが、その背後には様々な戦略的意味がこめられていました。その一つが、幕府にできないことを実現することであり、古九谷に結実した色絵磁器プロジェクトは、まさにその好例と言えます。利常は、中国の色絵陶磁器を収集するとともに、オランダの東インド会社を通して硬質陶器類を発注しています。そして、京都で色絵を大成した野々村仁清も支援します。そこには、仁清ブランドをプロデュースした金森宗和と加賀藩主・前田家との深い縁があったことは言うまでもありません。さらに、国内での磁器生産の先進地である九州地方の動向にも注目していました。

こうした入念な準備を経て、アンチ徳川の芸術としての古九谷は誕生しました。したがって加賀における色絵磁器プロジェクトは、一六四〇年代には着手されていたと考えられます。そして、前田利常が没して以後の一六六〇年代以降に、このプロジェクトは転換を余儀なくされたようです。このように、古九谷が示す独創的な力動感は、藩主の気概そのものであり、その点が若杉や吉田屋をはじめとする再興九谷諸窯に携わった工人や、明治時代以降今日に至る作家たちをも魅了してやまない所以ではないでしょうか。

今回は古九谷を中心として、春日山窯から九谷庄三に至る再興九谷の流れを概観したいと思います。

《色絵万年青図平鉢》吉田屋窯

第4展示室【近現代彫刻】

彫刻と人

2月15日(金)～3月21日(木・祝)
会期中無休

近代日本の彫刻は、人間の動きのワンシーンを切り取り、それをそのまま作品とするものが多くあります。例えば、木村珪二(一九〇四－一九七一)の《崩壊》は、男性が左手を天高く上げて顔を隠しているその瞬間を作品としています。

人間彫刻では、特に裸体の場合は人間の躍動感に溢れる肉付きや生き生きとした表情にも注目します。この点、吉田三郎(一八八九－一九六二)の男性像は非常によく表現されています。吉田は明治四十年(一九〇七)に東京美術学校(現・東京藝術大学)入学後、医療用の人体模型制作のアルバイトをしており、筋肉の付き方や骨格の構造など人体構造を知り尽くしていました。そのため、作品が内側から外側へつくられているとの評判もあります。彼は近代彫刻の父と言われる、オーギュスト・ロダン(一八四〇－一九一七)の影響を強く受けています。このことは、写実性を追求するだけでなく、作家の個性や内的な精神性を彫刻に込めて表現するという、新しい彫刻の考え方で、吉田は人間を彫刻でそのように表現しているといえるでしょう。

その他、頭像は近代社会において、個人を顕彰するために制作されたもので、近代日本においても偉人や権力者などの記念碑的な銅像が多く公共空間に設置され、社会に浸透してきました。このような作品は個人として似ているかどうかも大切ですが、その作品の奥にひそむ姿や別の表情を感じ取ってみると、もっと楽しめるかもしれません。

人と彫刻というテーマで、彫刻作品をお楽しみください。

木村珪二《崩壊》

第5展示室【近現代工芸】

美術館でお花見

2月15日(金)～3月21日(木・祝)
会期中無休

寒さの厳しい時期ですが、第5展示室ではひと足早くあたたかな季節を感じていただこうと、花をモチーフとした工芸作品を集めました。花とひとくちに言っても、写実的な描写から、デザイン化されたもの、さらには現実には存在しないような花まで、さまざまな表現があります。

中憲一《爛漫》は、満開の桜の花が見込みに描かれた平鉢です。写生に基づいた桜花が適度に省略化され、花芯や舞い散る花びらに施された金彩が、春のたけなわを感じさせます。上田外茂治《友禅訪問着「蒼天の樹」》も満開の桜を表現しますが、こちらは桜花がデザイン化され、ヴァリエーションを加えながら衣装を覆いつくすように広がっています。展示室ではまずはこれらの作品が、みなさんをお迎えします。

また富本憲吉《染付藤文向付》は、白地に青い染付のみで、軽快な藤文が描かれています。素早く最小限の筆数で描かれた藤文は、一見何の文様なのかわからないくらいに簡略です。定型化した文様を拒み、写生から出発して対象を極限まで突きつめることで独自の文様を生み出した、富本ならではの表現といえるでしょう。

展示室では春の桜だけでなく、菜の花、藤、薔薇、牡丹、椿など、四季折々の花を同時に楽しむことができます。何の花が描かれているのか、またどの季節なのか、そんなことも考えながら、ゆっくりとお花見を楽しんでいただければ幸いです。

中　憲一《爛漫》

第7·8·9展示室【近現代絵画·彫刻】

石川近代美術の100年

1月4日(金)～2月4日(月)
会期中無休

明治維新からの石川美術を当館所蔵品でたどる本展も、好評のうちに開催からひと月が過ぎようとしています。

明治期の石川画壇を覗きみると、当時の活況がうかがえます。日本画では四条派の画家垣内右嶙(かいと)・雲嶙父子が金沢に移り画塾を開き、そこから多くの日本画家が育ちます。また納富介次郎が全国に先駆けて金沢工業学校を開設するにあたり、優れた画家や彫刻家を招聘しました。多くが東京や京都で活躍していた芸術家であり、そこから数々の俊英が育ちました。また洋画では得田耕やその教え子早田楽斎が活躍。最も早い時期にイタリアに渡り、六年もの長期留学をした洋画家、佐々木三六は金城画壇の創設に関わるなど、金沢で活躍しています。

このような画家達の活気は、当時の地域情勢も大きく関係しているようです。たとえば人口分布を見てみるとよくわかります。当時日本の人口は今ほど一極に集中していませんでした。明治二年の藩籍奉還から四年の廃藩置県まで金沢藩は当時唯一百万人を超えていた藩でしたし、明治九年から明治十四年まで福井、富山と合併していた石川県は全国一位の人口を誇っていたのです。本展ではそのような石川の活気を作品から感じ取っていただきたく思います。

あまり大きく取りあげられることはありませんでしたが、昨年は明治維新から一五〇年の節目でもありました。これを機会に明治から続く美の流れをご堪能ください。

納富介次郎《仲秋山水図》石川県立工業高等学校蔵

2月前半の展覧会

第2展示室【古美術】

前田育徳会尊經閣文庫分館

新春優品選

1月4日(金)～2月11日(月·祝)
会期中無休

【前田育徳会尊經閣文庫分館】

今回は、特に県外からのお客様を念頭に、藩主所用の兜などの武具も展示しています。大名家に伝わった文物というと、やはり武具·甲冑のイメージが強いことは日頃のお問い合わせで痛感しているとおりです。しかし文化振興に注力した加賀藩主·前田家にとっては、名品の収集や名工の支援も江戸幕府への対抗意識が原動力となっている点で、武の側面が非常に強いと言うことができます。さらに今回は、絵画の魅力的な優品も展示しています。岸駒、ブーダン、鏑木清方を通して新春を寿ぎ、春を待ち望む気持ちをあらわしてみました。このような取り合わせはこれが初めてですが、こうしたコレクションの多様性も前田家の特質ということができるでしょう。

【第2展示室】

新年が明けて一か月が経とうとしていますが、今年の初夢は覚えていますか?·いい初夢であれば、よい一年になるといいます。昔の人がいい初夢を見ようと、枕の下に忍ばせたのは、「宝船」を描いた摺物でした。「ながきよの　とおのねふりの　みなめさめ　なみのりふねの　おとのよきかな」こんな回文の添えられた宝船が、ゆらゆらと浮かびます。財宝または七福神を乗せた宝船の図柄は、吉祥模様として好まれ、様々な調度品·美術作品のモチーフになりました。

現在展示中の《友禅宝船文のれん》も、新たな門出を祝うために作られたものです。空に飛ぶ六羽の鶴、はためくたくさんの帆が、友禅染の技法と刺繍で鮮やかに表されています。

《友禅宝船文のれん》

第3·4·6展示室【近現代絵画·彫刻·書】

現代日本の書家たち·優品選

1月4日(金)～2月11日(月·祝)
会期中無休

現代書を指す第二次大戦後の書作品は、書壇全体の有り様の見直しと再構築を迫られ、戦前までの書と見違えるほど多様な展開を示しています。漢字、かな、篆刻などの従来の古典派はもとより、少字数書、近代詩文書、前衛書など新たな分野を誕生させ、百花繚乱ともいえる表現の広がりを見せました。今回展示の戦後の書壇を築いた現代書の巨匠たちの時代、昭和を経て、今年は平成の時代も終わりを迎えようとしています。今回の展示から時代の変遷を顧みながら、時代の流れで発展してきた書の魅力を、感じていただけたら幸いです。

第3·4·6展示室では、「石川近代美術の一〇〇年」にちなみ、現在活躍中の石川県ゆかりの作家たちを含め、その後の石川美術を概観します。

石川県日本画の特徴は、多くが日展で活躍する作家だということです。当展示では石川在住五名の日展会員全員の特選作品も展示します。院展等で活躍する作家も増えてきており、そういった作家も取り上げることが課題となっています。

油絵の分野では、二紀、独立、国画、光風会など各団体の代表作家と、個展で活躍している作家の作品を一堂にご覧いただきます。世代は五十代から六十代で、石川洋画会を牽引している作家たちです。それぞれの個性あふれる作品をご覧ください。

彫刻分野では、金沢美術工芸大学の教員とその卒業生の作品を中心にご紹介します。卒業生である山下晴子は、石を素材とした作品を制作し、公共空間での作品設置を手がけるなど多彩な活動を展開しています。

手島右卿《飛》

2月前半の展覧会

第5展示室【近現代工芸】

新春優品選

1月4日(金)～2月11日(月·祝)
会期中無休

第5展示室では、近現代工芸の名品の数々をご覧いただきます。本稿では、板谷波山の代表的な釉薬加飾法である葆光彩磁技法についてご紹介します。

波山は東京美術学校で彫刻を学び、明治二十九年に白井雨山の後任として石川県工業学校(石川県立工業高等学校の前身)に教諭として着任しました。着任当初は彫刻を専門に教えていましたが、同僚であった北村弥一郎の築窯および釉薬製造技術を目の当たりにし、教諭として務めながら陶芸技術を本格的に学ぶことを決意します。北村は東京職工学校(東京工業大学の前身)で窯業技術を専門に学び、後年京都大学で工学博士号を取得するほどの人物でした。波山は北村から釉薬の調合法と磁器焼成技術を貪欲に学びました。当時校長を務めていた久田督からは「君はよくそこまで一生懸命に出来るものだ」と褒められたそうです。久田校長は工部大学校(東京大学工学部の前身)を首席で卒業し、福井中学(藤島高等学校の前身)の校長を務めた後、石川県工業学校の校長を務め、その後金沢一中(金沢泉丘高等学校の前身)の校長を務めた石川県中等教育界最高の教育者と謳われた人物でした。波山は素晴らしい校長と同僚に恵まれ、自身の窯業技術のレベルを飛躍的に高めることが出来たのです。葆光彩磁と呼ばれる器全体をつや消しの不透明釉で被う波山独特の釉薬による加飾技法は、優れた学習環境の賜物とも言えるのです。

板谷波山《葆光彩磁チューリップ文花瓶》

第7・8・9展示室

第29回
石川県水墨画協会公募展

2月8日(金)～12日(火)　会期中無休
※午後5時まで

石川県水墨画協会は、平成元年度発足、同二年に第一回公募展を開催し今日に至っております。公募展は石川県内の水墨画会諸会派及び一般個人を統合する当協会が行う展示会です。これは、過去の公募展の実績に照らし承認された会員の研鑽の場であると同時に、広く県内より一般公募し、厳正な審査の上入選作を展示し、水墨画の普及発展に寄与することとしております。従って各会派主宰の作品を始め、会員並びに一般公募の意欲的な表現による、楽しみな協会展ならではの作品をご覧いただけると思います。

多くの方々のご来場をお待ちしております。

◇入場料無料

◇連絡先／金沢市高畠一丁目四〇八
事務局長　村田栄子

第8・9展示室

第25回
北陸国展

2月15日(金)～19日(火)　会期中無休

北陸国展は北陸在住者とゆかりのある国展出品者等で構成され、今年で二十五回展となりました。

国画会(国展)は昨年九十二回を迎え、毎年春に国立新美術館で開催される歴史ある公募団体です。草創期の絵画部には梅原龍三郎、香月泰男らが、写真部には野島康三、木村伊兵衛らがいました。

北陸国展での成果が国展での受賞者輩出につながっています。今回は絵画部二十五名、写真部二十八名が力作、大作を発表します。是非ご高覧下さいますようお願い申し上げます。

◇入場無料

◇後援／北國新聞社、テレビ金沢

◇連絡先／横江昌人(北陸国展事務局)
能美市秋常町ニ五－一

第7展示室

平成30年度
金沢大学 学校教育学類 美術教育専修卒業制作展

2月15日(金)～18日(月)　会期中無休

絵画、彫刻、デザイン、美術科教育の各分野の学士課程による平成三十年度卒業作品を展示します。これらは、主に教職を目指す学生が、自らの学生生活の総決算として地道に努力を重ね、且つ創造的に研究し制作して完成させたものです。

未熟ではございますが是非ご高覧下さい。そして忌憚のないご批評、ご助言をお願いします。なお、在科生の作品も展示しますので、併せてご高覧下さいますようお願いします。

◇入場無料

◇連絡先／金沢市角間町 金沢大学
人間社会学域学校教育学類　江藤望
電話：〇七六－二六四－五五八二

第7・8・9展示室

金沢学院大学美術文化学部 第16回 卒業研究制作展

2月22日(金)～26日(火)　会期中無休

今年も、美術文化学部の二学科、美術学科(日本画・洋画・陶芸・漆芸)、メディアデザイン学科卒業制作の成果を発表いたします。小さな学部ですから出品作品数は多くありませんが、一人ひとりの表現や解釈の多様性に今日の若者の感性や関心の傾向を読み取ることは楽しいことです。

どうかご高覧いただき、忌憚のないご批評ご感想をお伝え下さいますようお願い申し上げます。

◇入場無料

◇連絡先／金沢市末町一〇
金沢学院大学美術文化学部担当受付
電話：〇七六－二二九－八九四一

2019年度

石川県立美術館友の会 会員募集

3月1日(金)から受付開始！郵送でのお申し込みは郵便振替で。
継続を希望される方も、改めてお申し込み下さい。

1. 会　費　二、〇〇〇円
2. 受付期間　三月一日(金)より開始。
3. 入会手続　次のA、Bいずれかの方法。

A　直接来館してのお申込み
・会 員 証：その場で発行。
・場　所：一階 情報・図書コーナー及び事務室
・申込方法：会費(現金)と入会申込書に所定事項を記入して提出。
・受付時間：午前九時三〇分～午後五時(休館日を除く)
※展示替えによる三月の休館日は、二十二日(金)～二十五日(月)です。

B　郵便局からのお申込み
・会 員 証：三月末から美術館だよりと共に郵送。
・申込方法：同封の払込取扱表に所定事項を記入し、最寄りの郵便局(ゆうちょ銀行)窓口にて支払い。払込手数料は申込者負担。
・注意事項：郵便局で払込した方は、同封の申込書を郵送する必要はありません。払込取扱票の受領証は、会員証が送付されるまで大切に保管してください。
◇郵便局(ゆうちょ銀行)備え付けの振替用紙をご使用の場合、口座番号・加入者・通信欄に左の事項を記入して支払い。
・郵便振替口座：〇〇七〇〇－七－四六四九〇
・加　入　者　名：石川県立美術館友の会
・通信欄記入事項：年齢、性別、会員の区別(継続・新規・元)、職業、継続会員の方は現在の会員番号

4. その他
◇会員証の有効期限：二〇一九年四月一日～二〇二〇年三月三十一日
◇会 員 証 の 対 象：記名者本人のみ(ご家族の方との連名受付はありません)。
◇一度納入された会費の返金はできません。
◇会員証紛失による再発行はできません。

会員の特典
●コレクション展に無料で入場可(要会員証・会員本人のみ)
●企画展入場券進呈(春季・秋季・冬季三回の企画展のいずれか二回に無料で入場可)
●企画展の開会式(開会式がない場合は初日)にご招待
●入館料の割引(要会員証)
①同伴者二名まで：コレクション展、企画展観覧料が割引
②会員本人のみ：石川県立歴史博物館、石川県七尾美術館、石川県輪島漆芸美術館、石川県九谷焼美術館、石川県能登島ガラス美術館、金沢二十一世紀美術館、脇田美術館の各館主催展覧会を割引。
●館主催諸行事への参加
●館内カフェ「ル ミュゼ ドゥ アッシュ KANAZAWA」にてドリンクの割引(要会員証、平日のみ)
●最新情報をお伝えする『石川県立美術館だより(本誌)』を毎月郵送

2月の行事予定

■展示室でスケッチGO！	午前10時～11時30分	1階企画展示室
2日(土)	展示室でお気に入りの作品を、磁気式ボードを使ってスケッチ！ ※観覧料を団体料金に割引します。	
■文化財保存修復工房セミナー	午後1時30分～	美術館ホール、聴講無料
11日(月・祝)	「文書料紙入門：紙から歴史を読み解く」 講師　本多俊彦 氏(金沢学院大学准教授)	
■映像ギャラリー	午後1時30分～	美術館ホール、参加無料
10日(日)	「加賀百万石　美と歴史」(33分) 「日本の美4　日本の色―王朝装束より」(26分)	
24日(日)	「美術のみかた4　近代の人間像」(22分) 「極めるⅡ　古九谷」(25分)	
■土曜講座	午後1時30分～	美術館講義室、聴講無料
9日(土)	「浮世絵　キホンのキ」	学芸員　中澤菜見子
23日(土)	「大人の対話による鑑賞～実践編～」	担当課長　深山千尋

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.35

《金彩老梅水指》きんさいろうばいみずさし 口径18.2cm 胴経18.8cm 高19.4cm 昭和38年(1963)

六代清水六兵衛 ろくだい・きよみず・ろくべえ 明治34年-昭和55年(1901-1980)

口から胴にかけて締まり再びゆるやかに広がる器形は、大胆に筋目をのこして成形されています。全体にマットな釉薬を施し、その上から金彩で梅の大樹を描きます。満開に咲いた梅の花芯の金が特に鮮やかです。くびれの部分の左右非対称な形状や、荒々しい筋目によって、器形それ自体が老梅の幹であるかのような存在感が生まれています。

清水家は初代六兵衛(一七三八-九九)が京都に出て製陶を学び、明和八年(一七七一)に独立して五条坂建仁寺鋳鐘町に開窯したのが始まりです。六代六兵衛はその直系の子孫で、五代六兵衛の長男として生まれました。大正九年に京都市立絵画専門学校本科を卒業。二年に京都市立美術工芸学校、十絵画を学んだのは三代以来の習わしでもあり、また「これからの陶器は〝ろくろ〟だけに依存してはならない」という父の言葉に支えられてのことでした。十四年の第十二回商工展で作家としてスタートし、大正の自由な気風をまとう作品やアール・ヌーヴォー風の作品を発表。後には中国古陶磁や琳派に着想を得た作品を制作しています。終戦とともに家督を相続し、六代六兵衛を襲名。生涯にわたって釉薬や焼成法の研究に没頭し、昭和二十八年の新釉「銹泑」、三十年の新焼法「玄窯」、四十六年の、ガラス釉に金銀彩を施した「古稀彩」などは高く評価されています。

次回の展覧会

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第２展示室
名物裂と茶道美術	春の優品選 茶道美術を中心にⅠ

会期:3月26日(火)～4月15日(月)

1F企画展示室(7・8・9展示室)
2Fコレクション展示室(3・4・5・6展示室)

第７５回　現代美術展ー日本画・彫刻・書ー

会期:3月29日(金)～4月15日(月)

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　360円(290円)
大学生　290円(230円)
高校生以下　無料
２月4日は第1月曜日により
コレクション展示無料の日

2月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00

2月の休館日は
13日(水)・14日(木)

広告
「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか？
石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ
郵送配布!! 3,000部発行
ターゲットを狙った 知名度向上
県立美術館発行の 信頼度の高い広報媒体
お問い合わせは ☎092-716-1401
株式会社ポープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第424号(毎月発行)
2019年2月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/